

一九五一年の七月三日 (その一)

繁華街のデパートの自蔭に

蹴踏に混って一群の人妻かり子

義足と露未させこぢりこむく白衣の男

もの哀しい夕にデパートに合せては腕の男かち声

に殺つてい子

その前に立つカーキ色の男(童)

かゝるかみ 知らなくたはむお麻兵(童)

七月三日の苦痛と博愛の一角に

中民は呪いの視せこをさらせはをわかめと通

りすき

読本か大きく酔けを行くをしまさし

とり残された男(童)よ

甲と飲けを南くかよひ

語りしげにほりたその靴の下に

やさしい人達の目地の埋まり

女の日の泣き声か

男の妻の子 水(童)よりむかたしく

大きく ちかすます思く

積りの空流とちろ 響くうを

その気とつた服が 1.1の血で固まらぬ中

に

まくかよ

一九五七二〇